

EDITORIAL COLUMN

社説

庄内町清川出身の幕末の志士、清河八郎は1855(安政2)年、母を連れて全国を旅行し、旅日記「西遊草」を書いた。東京のNPO法人「元氣・まちネッ ト」(矢口正武代表・戸沢村出身)は、その県内ルートを「西遊草の道」と名付け8月と11月の2回に分けて踏査、八郎親子が歩いた道筋を探った。歴史の道への関心が高まる中、旧街道を地域資源として生かすヒントにしたい。

清河八郎「西遊草の道」

歴史生かして地域振興

や妹が伊勢参りをする際の参考になるように各地の風物、風俗などを筆まめにつづった。江戸時代の旅日記は多数残っているが、母を通して大旅行をした記録は珍しい。尊王攘夷の志士、策士といった八郎のイメージとは異なる、親孝行で人間味豊かな一面が伝わってくる。優れた紀行文として作家の著書や郷土史資料など

四方に青々と山や谷を巡らし、山間の眺めのよい村である。「米沢城下から赤湯(南陽市)まではまるで葦葦の上を歩くようだ」「猿羽根峠から望む馬海山の形は富士山によく似ている」「東洋文庫「西遊草」」などと書いており、日記にある場所の現在を検証した。

各地で八郎や清川の生家と縁の深かった

どに引用されることも多い。「まちネッ ト」の踏査は、前半が清川から鶴岡市中心部、田川、小国などを経て新潟県境を越える地点まで、後半は福島県境から米沢、山形、村山、大蔵などを經由し清川まで八郎親子の旅路をたどった。

八郎は「温海川宿(鶴岡市)で休む。大人たちの人物像に触れる一方、八郎親子が泊まった旅籠(はたご)などを探して昔のにぎわいなどを聞いた。宿場の面影を残す家並みや、落ち葉に埋もれ分かつたにくくなった旧街道の石畳、荷車を通すため切り通しにした道などを歩き、思わぬビューポイントにも出会った。

志して家出し、江戸に向かった県内ルートを「回天の道」と名付け2009、10年に調査したほか、英国人旅行家イザベラ・バードや芭蕉、義経が旅した県内ルートもたどり、延べ千回にわたって本県の歴史の道を踏破した。矢口代表はそうした経験から「山形には素晴らしい観光資源がたくさんある。さらに魅力を高めるには市町村を越えて街道を結び付ける広域連携が必要だ」と話す。